たかさご史話 56

～高砂市域の近世史料について～

まもなく、高砂市史の近世史料編が刊行される。それでその予告というか、紹介を兼ねて、高砂市域に関する江戸時代の史料について書いてみる。

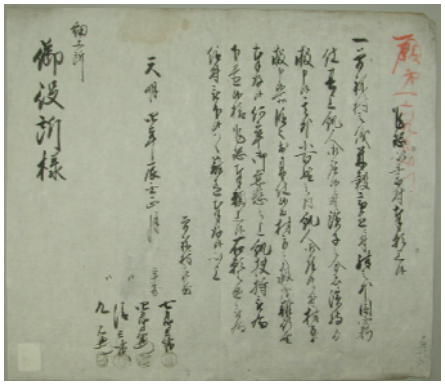
そもそも江戸時代の史料というのはどういうものだろうか。というと、博物館などに展示された、和紙にみみずのたくったようなくずし字を書き付けた古文書を思い浮かべる人も多いのではないだろうか。みみずののたくり字は現在の我々からは読みづらい字だが、ほとんどのものは「御家流」というきまった書法で書かれているので、そのルールさえわかれば、意味をとるのはそんなに難しくはない。この「御家流」は江戸時代に、庶民の教育機関寺子屋で教えられたもの。江戸時代には話し言葉は今以上に方言がきつかったが、「御家流」の書き言葉は全国共通語だった。東北の人と九州の人も筆談で友達になれる。

さて幕末段階の日本人の識字率は世界でもトップクラスで、日本を訪れた外国人は日本人の読書好きに驚嘆している。普通の人々が文字を自分のものとした。だからこそ江戸時代の史料は中世に比べて圧倒的に多く、また内容的にも人々の生活ぶりがわかる好材料なのである。高砂市史の近世史料編では、江戸時代の高砂の社会の変化や生活の状況がわかるような、町村の調査である「明細帳」をはじめとして、多種多様な史料を紹介する予定である。

また江戸時代の史料が現在にまで伝わってきたのには、様々なルートがあった。江戸時代の町村の史料は散逸してしまったものの方が多く、近世史料編でも残念ながらほとんど史料を紹介できない地域もある。しかし江戸時代の村で受け継がれてきた史料が明治維新後庄屋、年寄といった村役人の家や水利組合、自治会などの団体に伝えられてきたものや、戸長役場を経て市役所に受け継がれている曽根村などの文書もある。高砂市史の近世史料編ではこうした史料の受け継がれ方についても注目し、今後も貴重な史料を保存していくきっかけの一つになればよいと願っている。

また史料というのは紙に書かれた文字だけではない。近世史料編では町村の地図、もの、家屋敷図なども紹介する予定である。

（市史編さん専門委員　中川すがね）



▲曽根村文書